

経営者は、誠実であることを心掛けなければならない

一般社団法人アーネスト育成財団
理事長 西河洋一

財団は、技術経営人財の育成をすることを目標にしている。財団の名称を「アーネスト」としたのは、経営者は「誠実でなければならない」との思いからである。

「誠実」であろうとすると、日頃から自分を高める努力をしなければならない。最近、能力主義となって、自分が、自分がと、自分のみを見つめて、自分が目立つように自己主張する人たちが多くなっている。世の中が急速に変化するとき、周りへの気遣いを忘れて、どうしても利己的になりがちである。

経営は、いかに組織を運営するかである。組織をまとめ、組織全体のパワーを出そうとしたり、顧客や協力会社と協業をすすめようとする利他の心が重要になる。自分を出し過ぎると協調が取れなくなる。

以前に誠実な人財についてこのコラムに書いたことがある。人の話を伺う際に心掛けていることとして、話を聞くとき謙虚であればと、自分の器より大きな器で謙虚に聞くべきの二つあると報告した。

一つは「川の水が高い所から低い所に流れるのと同じように、情報も高い所から低い所に流れる」「人の話を聞く時には先入観を捨て自分を低い位置に置いて聞く」「下から見上げていないと求める情報は流れて来てくれない」「聞いたとしても情報の重要性に気付かず、聞き流してしまう」と。

もう一つは「聞くにあたっては器を大きくする」「大きな器には沢山の水が入るが小さな器には少しの水しか入らない」「経営に関わる情報は、自分の能力以上の広くて大きな器を持って視線を低くして謙虚に話を聞く」と整理した。

「誠実」な行動を心がけても、問題を起こしてしまうことは多い。問題に気付いたら、自ら現場に立ち、誠実な対応を謙虚な姿勢で対面し、取り組むことが重要である。まずは非礼を謝り、速やかに対応策を考え、結果的に迷惑が掛からないようにする。経営リーダーは、問題が発生してからの対応が重要であることを胆に銘じなければならない。